

柏木 寛*

Hiroshi KASHIWAGI*

人間がこの世に誕生以来、光とのつき合いは続いています。私達の祖先は、早くからこの光というものに感心を持ち続けました。その結果、13世紀に眼鏡を発明し、17世紀に入り、今日の科学哲学の祖といわれる、デカルトは1637年に光の屈折に関する書を表しています。1666年にはニュートンのプリズムによるスペクトル実験が行われました。

我々は、レーザーの発明によってコヒーレントな光源を得ました。スペクトル幅も狭く単色性に富んだ光源を手に入れました。しかし、現在に至るまで、自然界にある光と色を正しく客観的に記述しえないでいるのです。この問題を解決しようと物理学、生理学、心理学といった学問分野でそれぞれ大いなる努力が払われてきました。しかし、基本的問題は、人間の視覚(眼識)を内包するため、「身心分離論という二分法では解決し得ない」ことにあります。人と人で行われるコミュニケーションの学問である情報学や、人間と機械のインターフェースにも見られるように、要素還元主義に立脚した現代科学技術哲学に変革を迫る、本質的な課題を含んでいます。

解決の道は、身心一体論に基づく科学技術哲学にあると考えられます。これらの基礎は、仏教哲学に見られ、禅哲学は、有効な基礎となりうる要素を備えており、西欧の科学者からも注目されつつあります。

禅の教えでは、「識を転じて智を得る」と言います。その識には六つあり、六識といいます。眼で物を見てうる「眼識」、耳で音を聞いてうる「耳識」、鼻で匂いを嗅ぐことにより得る「鼻識」、舌でものを味わう「舌識」、身体(皮膚)で触れることによりうる「身識」があり、これらを前五識と言います。次に我々が精神で分別する「意識」、という第六識というのがあります。その奥に「私が」という「我見」の元となる「末那識」という第七識があります。さらにその奥に「阿頼耶識」という第八識があります。この第八識は「無意識」の世界です。無限の過去からの自他の善悪すべての経験がこの「阿頼耶識」の中に蔵されているとみて、「蔵識」ともいいます。これらの「識」を転じて「智」とするのが仏道の修業であるといえます。全く同じことが科学技術の研究にもいえるとおもいます。

我々が生きているのは意識があるか否かによるといわれます。それでは意識とは何かと言えば、主体が客体を認識するプロセスと言えます。意識の成立が主体と客体の分離を待って可能になるのです。主体とは、この私の意識ですから、私の成立がそのまま客体すなわち客観世界の成立なのです。しかし、何時どのようにして発生するか、そのメカニズムは殆ど分かっていません。我々が対象を認識する、ないしは意識するということは、対象と融合する側面を多かれ少なかれ持っていることとなります。フロイトもユングもその心理学は、無意識の心理学と言われます。しかし無意識とは本来意識を説明するための構成概念にすぎません。

我々が自分を含む系について考える基点は、この辺にありそうですが、21世紀にはこのような問題も解決されることを願っています。

* 慶応義塾大学理工学部 (〒 223-8522 神奈川県横浜市港北区日吉 3-14-1)

* Faculty of Science & Technology, Keio University, 3-14-1 Hiyoshi, Kouhoku-ku, Yokohama, Kanagawa 223-8522